陸水圖說

ヲ1
3398

洪水圖說

歌川國員画

洪水圖說叙

霖雨淙々として宇宙朦くして屋いりて席上小菌を生じ戸い破るく竈下に蒲漂ふ蟹い跂ふ背後の壁鯽々汕ぐ面前乃庭正り是三災壞劫の中水厄二禪天河のごく。巨霊神ぐ術ふ弗ぢんぢ。山岳を碎き激水を西流做ん支能ぢ夏禹王ぐ力をうゝぢんぢ。漲流を治め平均なゝしむるなり成匝ゝ一角仙人守敏僧都今何のところゝ在。其竈を招くゝゝぐ。敢て復ゝさる支なく。

ヲ1
3398

博物志ふ所謂止雨の祝も。百偏とかつくさるふ
験あく。惘然る嵩下ふ。一葉ふ掉さして酒食と
餽り来まる個あく。誰やとこれぞ別人あるまぞ。
書肆玉淵堂の主管あう。洪水乃圖説を請需
るまく。机上乃蝸牛を撮退譲る筆楳あうくの
ごとく

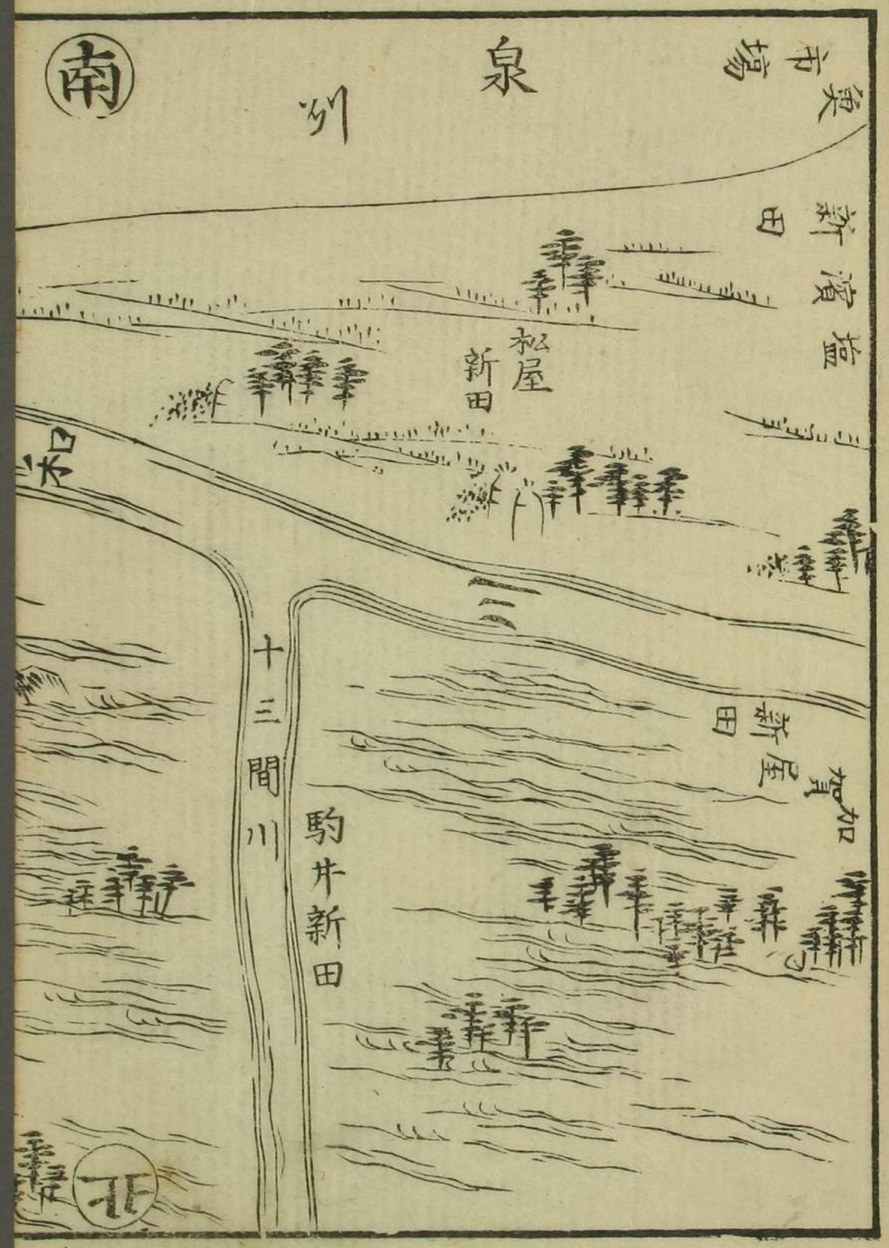
慶應四戊辰年仲夏　南坡艸人題

高

洪水圖説

慶應四年辰春より折く雨ありて入梅もあるべ
乾つゆあるんと思ひの外閏四月十五日入梅とありあ
大りと雨天續なりしが五月十日頃よりまたく雨強く
降て遠国もちるぞ五畿内の川く大水るく同月十一日
昼九ツ時ごろ伏見京橋落同日昼七ツ時淀の大橋小ぞし
砕け流まと下り大坂天満ぞしふくり其夜四ツ時比さの
半バ三分一まるり頽をも尚中さ天神ぞしも危く見
一一所人かをりつてやうくと防ざるしが中の嶌

堂島へんの大道へ水あぐり道頓堀新川小茶屋五六けん頽
る幸町うゝ川い大道を舟ふく往来し木津難波いた
めんの海のぐゝく住吉新家より南へ尤甚ゝし其故い大
和國長谷川の堤所く壞處多く川の北側にて新家目安
村服部村南側ゝてい舟戸村市場長示村等大水りて人家
都合四百けんぢり流る死人いまゞ數しるこの川
ぢぢ河内あゝくゝ大和川へ流るゝる所駒が谷あるる
前の石川の水勢まゝ洌ゝく滝の如く小激りて古市尾
黒の大黒皆く浸り築留の下大井乃堤南側壞ゝ小山



堺

大和ぢ

遠里小野

沢ノ口村

濱日村

安立町

住吉

そうだや

冨田新田

万屋新田

板ぢ落る

沼村

みわ〜

つきどめ

三ぶ八

芋田

あびこ

木の本

吉田

下の太子

平野

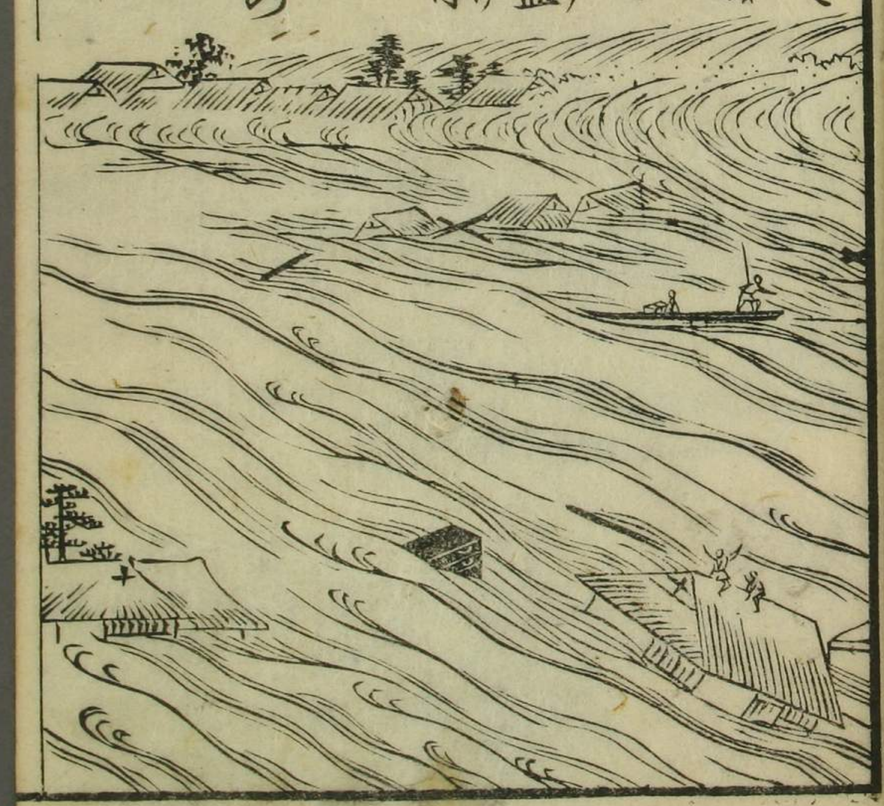
みくい團扇屋一軒羔るく其余い潰まらざけ大堀も同断、若林の小川の南側小一軒の茶店あり〻甚ざ内福のよ〻して兼て貯置る米三十俵余麥五十俵あまり有〻と主人少も惜む心なく是を以て前の

小川を防ぎ〻ゆゑ是より南の方い無支なり〻とぞ此支むか〻石田三成洪水の時米俵まく防〻支あり其即智賞ちべ〻此茶店の主人此支を知てのあ〻まさい〻ぞし〻て斯斗ひ〻ら何ともせよ野人まい似あいぬ心ぞく感ぞべ〻く此度も限ぞこれらの支々諸人よく心得て善根をあまぞべさ支こ大堀い人家一軒もなく川辺まさ同断なり十三日の七ツ時比此川ちぢの大水漲り落て大和ち〻少〻上手の堤二十五丁程きれ〻り此水安立町へ溢来〻り此町九丁

安立町水戸

の間半分より南へ
殊更ふ水勢列く
大浪俄によせ来り
人家へ一時ふ頽さ
流れ老少男女牛馬
鶏犬まで皆く溺死
す此所ふ大喜と
いふ富家ありしが
金子四千両紛失て

そうろう八百両もて
きりく助舟にて遁
しとくやうる時
ふ助舟ふ支よせ盗
人ありしと諸人見付
大勢にて打殺し
そう誠に憎むべきの
限と云べし扨また
或家より幼少の



者二人窓より
顔とさしいだし
助てくれくと叫び
うば舟とさし寄
んとすると共其
家より吹出る
水勢すばやくさま
働け共近付こと成ず
〳〵其上大雨りき

舟に阿伽が入ゆく
其舟さへも危けき
ばゼひのく見殺て
ゼーとて此町にも
北の方へ寄る家の
者水死する支残念
ありて四人言合
首縊て死る
しる此家い床

の上遊水い上一
うど頼ど

住吉社

四人の者い損て
成り余り周章
る支こそ笑ぐ
さ小成り斯吠も
天命こ任て必ど早まる
不可呼くよ雑
具死骸ゐど流ま中こ

神宮寺

地車ゐこ五つも流ま
来りーとど十三間
川の水りて海

十海神

と一つよゐり駄井新
田加賀屋新田い跡
りこもゐく成て方
角も分ど住吉新
家の辺残ら

奥天神

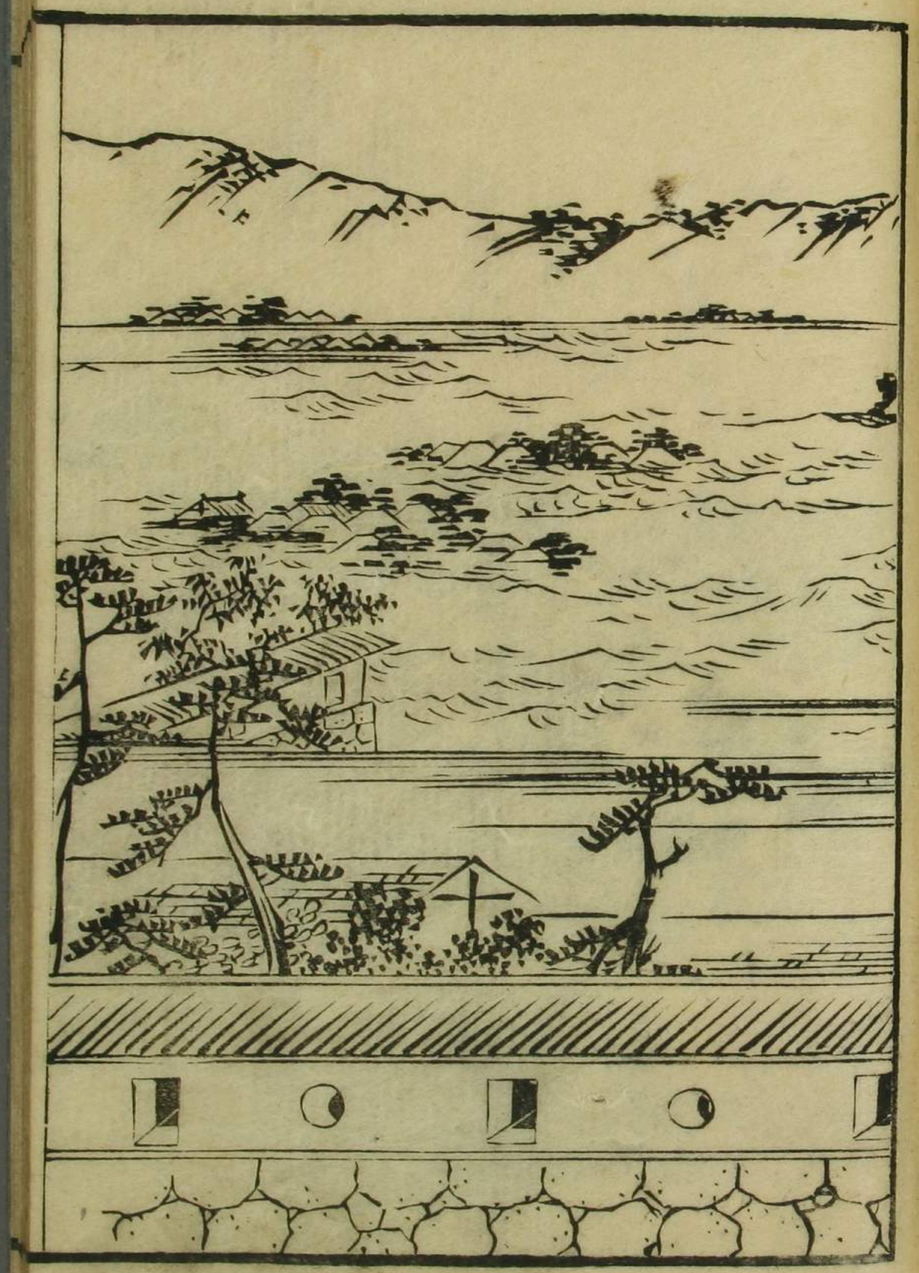
浸り図の如く舟

住吉新家

二文字屋

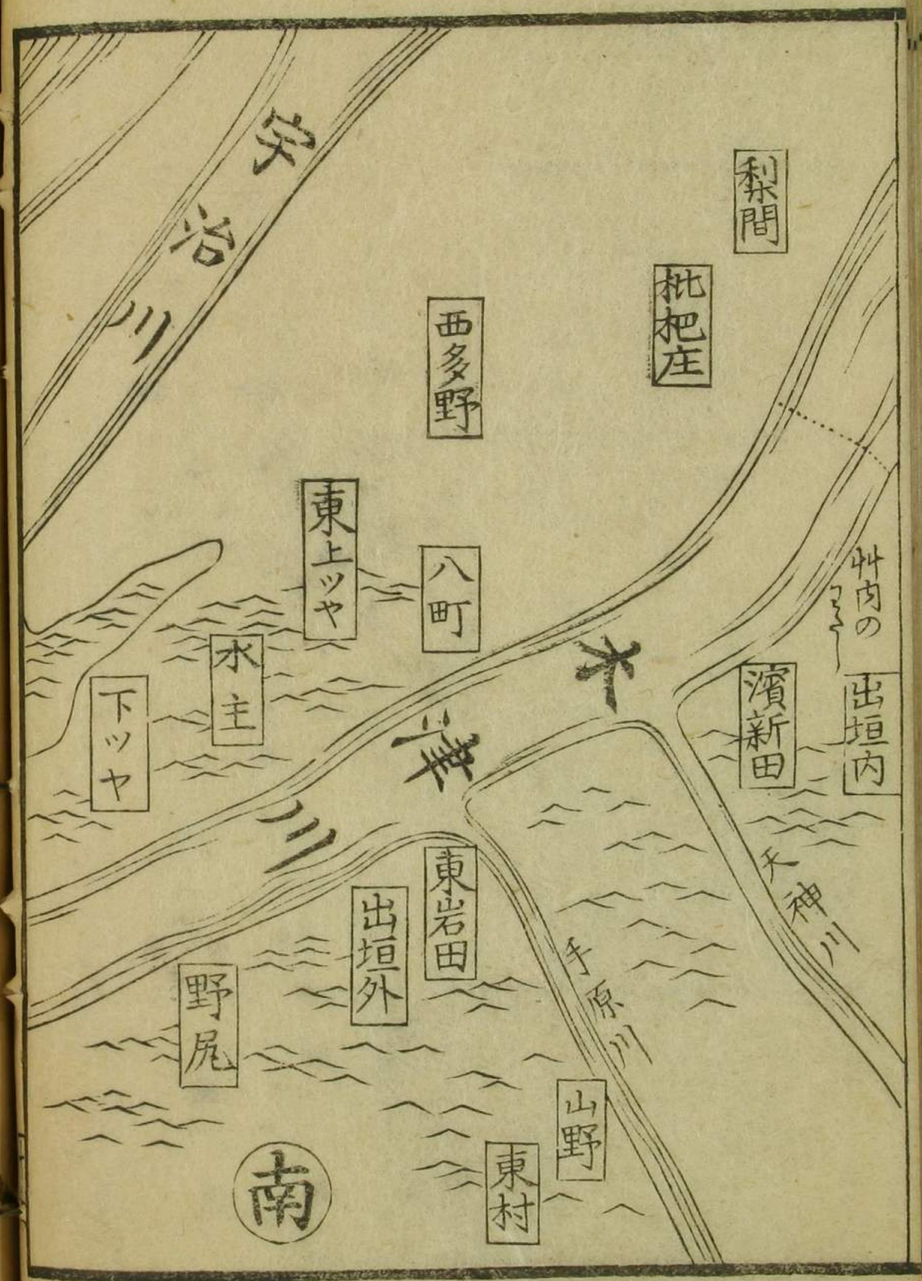
して往来せし山辺の人数都合七百人余も不知然るに共六百
人余りの境より助舩救艘来りし故助りしこの右人数境々
処々へ戻り父母妻子親類不逢て皆く嬉し泣くるみしむし
是全く八百萬神の御助けと仰ぎ奉り諸人大きり
悦びけり大坂近辺の所々大いに荒ざる所なかけるに共
先安立町ゞ第一の損亡なるべし堺より東南へりけて
浅香山今池蛇の池辺も水甚だ高きよしあり扨又十
八日十九日廿日大雨して廿日の夜再び大和川の切口より
大水して安立町より住吉新家迄水高く其難儀いうん

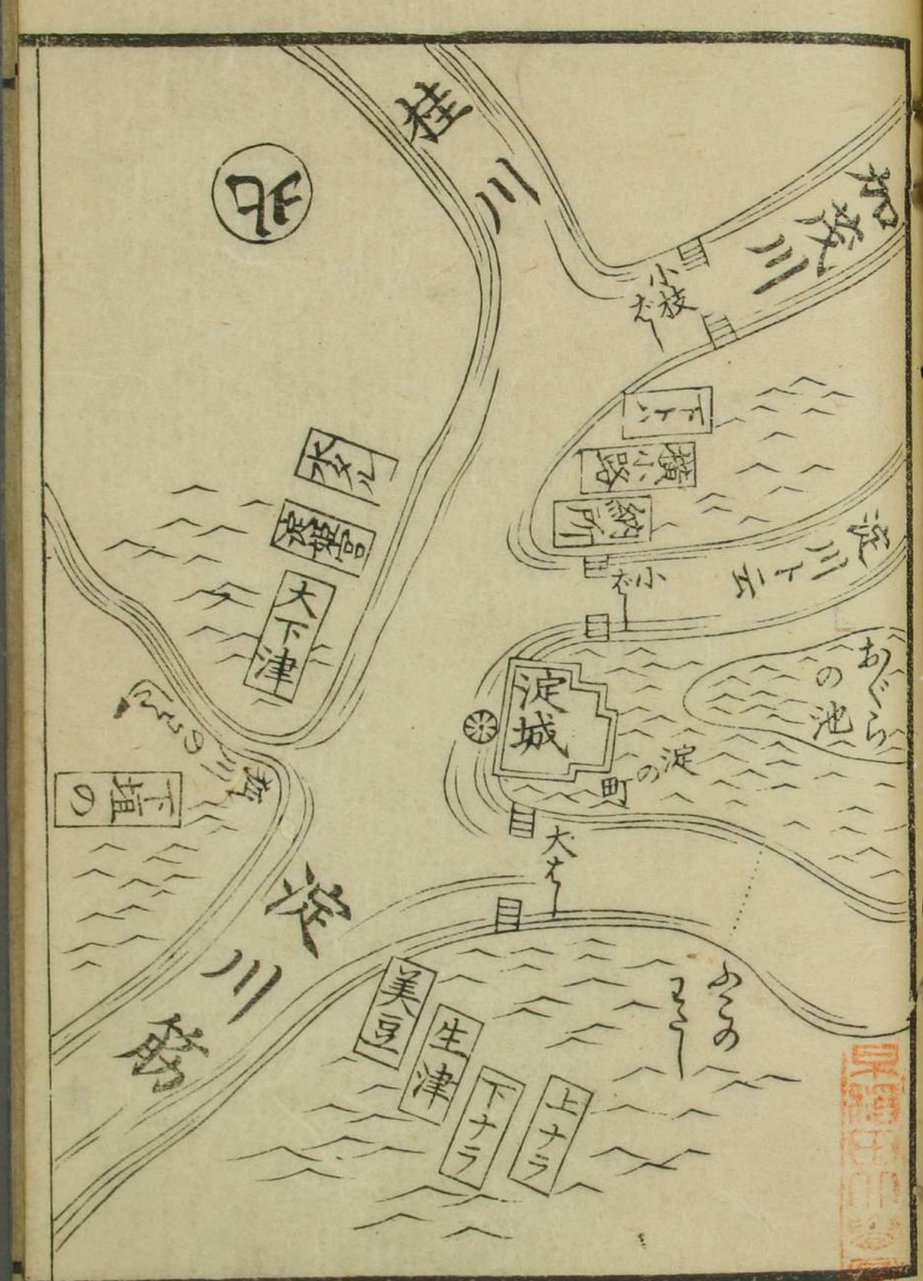
うるに扨又天王寺より南田辺平野近辺も舟なくて
通行成ざるに是いなぐ内水なるに枯木村の堤よりの越水
も有由に丹南黒山真福寺阿弥村菅生村辺も洪水に扨
又玉造辺なるに大川もなく唯猫間川と平野川のみ
あるに共御城の堀東の方水あふるるに二軒茶屋より東を
うれど高井田村まで一面全く大海のごとく所々の村里或い
森の樹木のみうかびにうるい奥州松嶋の風景に似うり
今里深江若江辺い水勢も最うすゆゆ古き家の倒い
多くあるべども流るゝと云事なるのさまどもあるこの



五月雨や
濤へ
ゆくも
まろう
道
汝水

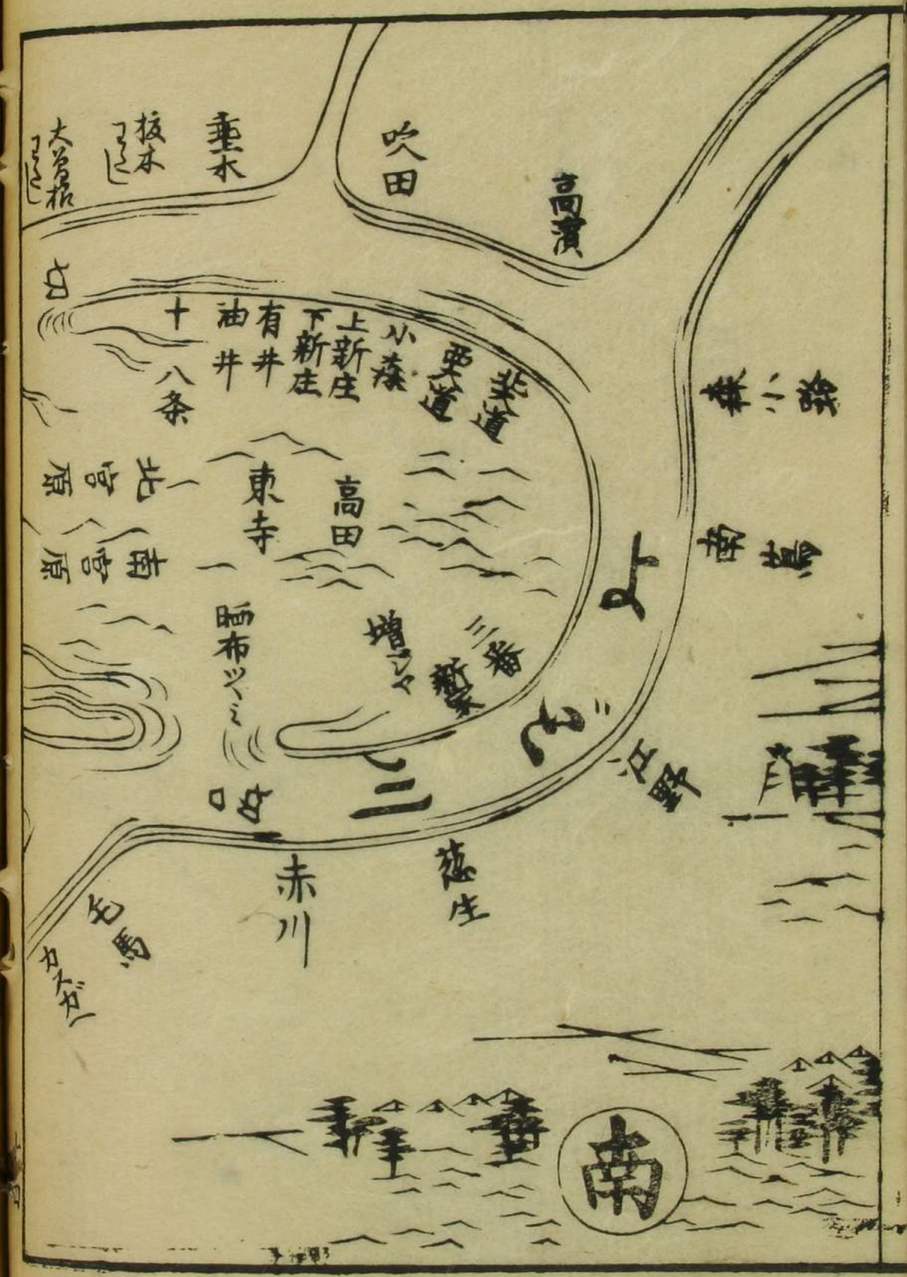
小蛇樹木の梢なる釣瓶のもらるゝを登り巻付家々に
集り来り追ども打ども退ぞ古き縄を乱せるごとく
其殿しき支言語尽しがたし然る小雨も半ばつよく
降て地水を叩くゆゑ水烟もちて咫尺も分ぬ食物を貯
へ家々も飲水を断し桶盥等に天水をうけ或は
是非なく糞穢の泥水を用ゆゑ十人が六七人い腹を
痛め腹の泻支痢病のごとく元よりの大病人は是がゆゑ
死る者あまた四方皆大水ゆゑ葬礼も成がたく四五日
も其侭に置ゆゑ臭気鼻を撲て堪がたく病気と傳染
もすること少からぬ殊更に悼むべきは淀川の東街道が
てい枚方橋本八幡淀より伏見西街道にて山崎より
竹田鳥羽辺の者い今年早春の兵火が焼立られ其上斯
る水難にあひ田畑い残らず失ひ牛が飼べき秣もなく
さらに支なく水い引ども此後といふて取つぐ可や
哀なる有さまし就中淀の城下い桂川加茂川宇治川木津
川の落合にて少しの雨にも常に洪水なる小此度の淫雨
にて町家い勿論城中さへ水高く住居成がたき程にて美
豆下るら上あり又川向ひ大下津水垂淀姫の宮乃辺り

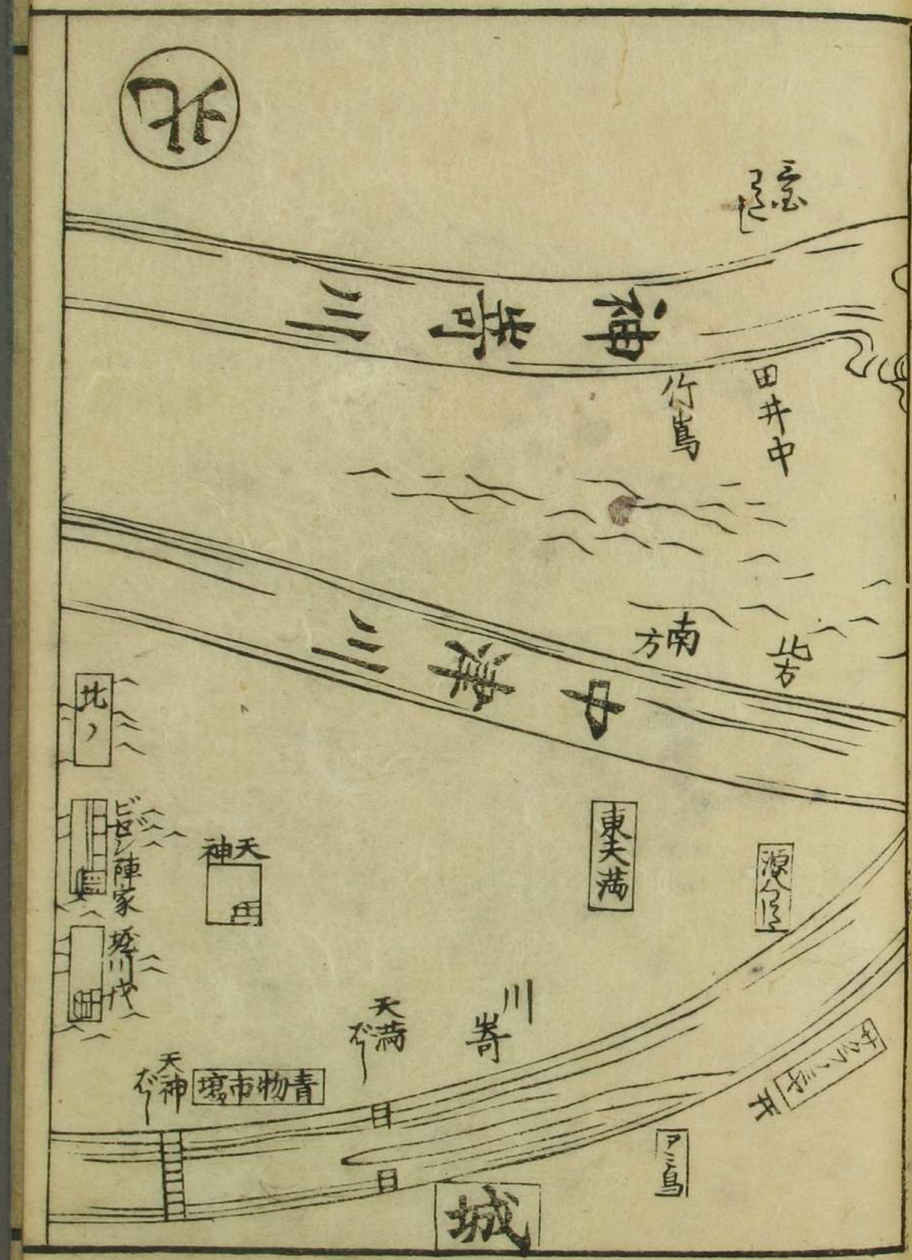

安治川
梨間
枇杷庄
西多野
東上ツヤ
八町
水主
下ツヤ
竹内の
出垣内
濱新田
天神川
東岩田
出垣外
千原川
野尻
山野
東村
南


桂川
西成郡
小枝
目
三ツ屋
小
目
三ツ屋
あぐらの池
淀城
淀の町
大
目
大下津
上ノ島
淀川
美豆
生津
下ナラ
上ナラ

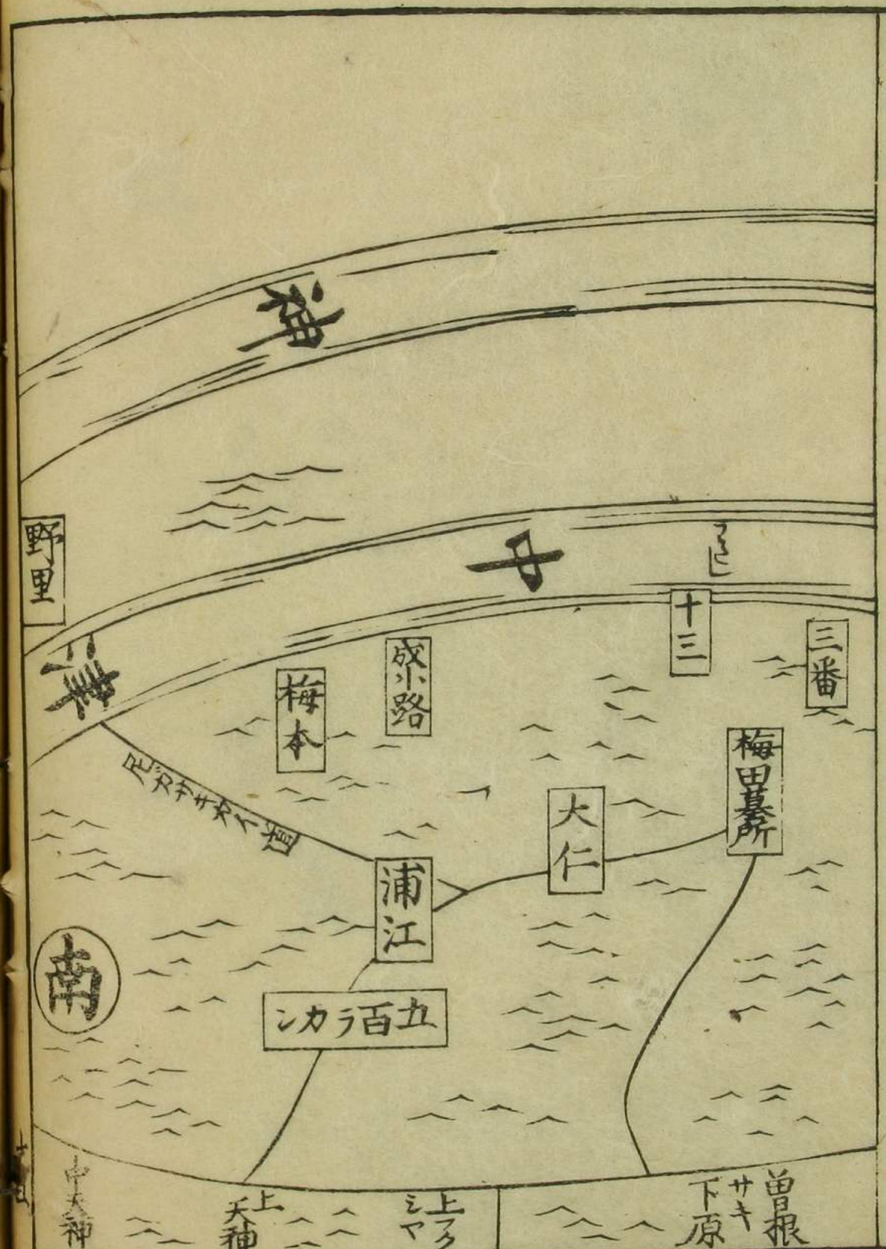
一圓ふ水高く家と流し溺死する者数しるべき言語筆
紙のよく及ぶ所にあらざる殊更去る十二日木津川すぢ
二階川の堤越水の所又五ケ所も壊碎け長福寺と云寺
一ケ所小寺村郷藏二ケ所人家六七軒倒れ半潰る数知
れざる西出垣外町尾町三外町出北の町出中の町二百けん
斗り浸り當日より十四日の夜まで内川所くきれ中ぶと
本町東在所出垣外の間にて凡六百軒斗り浸り其中過
半倒れる家あり山崎の下前嶌辺より廣瀬水無瀬迄名
よも似ざるいづれも深き淵と成り扨又此川下つゞき

三嶌江少しきれ晒布堤大きくなりて入神崎川中津川の
間ゞ中島の村ゝ残らず流れ家一軒もなく西の方田
井中辺のてゝまで切込る少し中嶋東西三里の間神崎
川と中津川淀川にて一ツになり一面の大海の如く長柄
て堰止の人足大勢の内十三人土俵をとりさげあぐ泥の
中へ入込で死る中津川より南十三村三番村あり一
面の海となり曾根崎下原い云ふおよびぶ福嶌五百羅漢
の辺梅田の墓所浦江大仁あり都て二階住居く上
福嶌野田圓満寺にて十三の少僧流れ死る蝦江西九条


吹田
高槻
垂水
坂本
大津
北道
更道
小森
上新庄
下新庄
有井
油井
十八条
高田
東寺
増ヶ
三番
野江
赤川
蒲生
白馬
カンガ
南


京
田井中
竹島
南方
岩
北ノ
ビル陣家
天神
東天満
源八区
天満
川
寄
天神
青物市場
アミ島
城

今福
梶嶌
杭瀬
稗嶌
北傳法
新家
野田
下福島
下天神
西九条


海
野里
十三
三番
梅本
成小路
梅田墓所
大仁
浦江
五百ラカン
南
上天神
上ノ
曽根
下原

大雨日日連
水浸町又野
物皆無不沾
唯乾人鼻下

南波狂夫

中津川と西こそ野里・稗島・神崎川の西今福・梶尾・杭瀬の辺り何ども水こうく大坂の西濵川口の外國人旅館とひこ〳〵此辺皆こ舟こ〳〵止りしゆく市岡・泉尾・勘助ど寺嶋あどへ海中の孤嶋のごく其心細き支いこうこと道頓堀上大和橋辺こそ武士一人相撲取一人水練のけいこすること川へ飛入其侭こあぐこ死こう大坂の大川はじふこそ子とどここる男の死骸簞笥こ取つきこる女のこどへ牛犬其外こどくの雑具日くこあぐこ来る支駭ごこく誠こ目も當らこざる有様こ長堀こ南ど格別こ水高

怪我人も少うこそ然らふ所くの堀くの川端の輩うくる大變こうこどこ網おど持てこうづうのざこをすくこうこそこりこけ躍こおりて流こと死こる馬庶者もあり扨又兵庫より便来ありて彼地の噂こ聞こ同所南和田町の海辺へ頽こる家多く流こうこう其中こい瓦ともこさるすくの家もあり定めく安立町より来りこあくこんが餘程の海上こ風波こりこまあどく瓦の落ごるも奇妙ごる支あり是こ思へば昔より洪水の支記こる書こ小屋の中こ燈こ小児の哭声こて流こ来りこと云つるも偽こいあらぬ

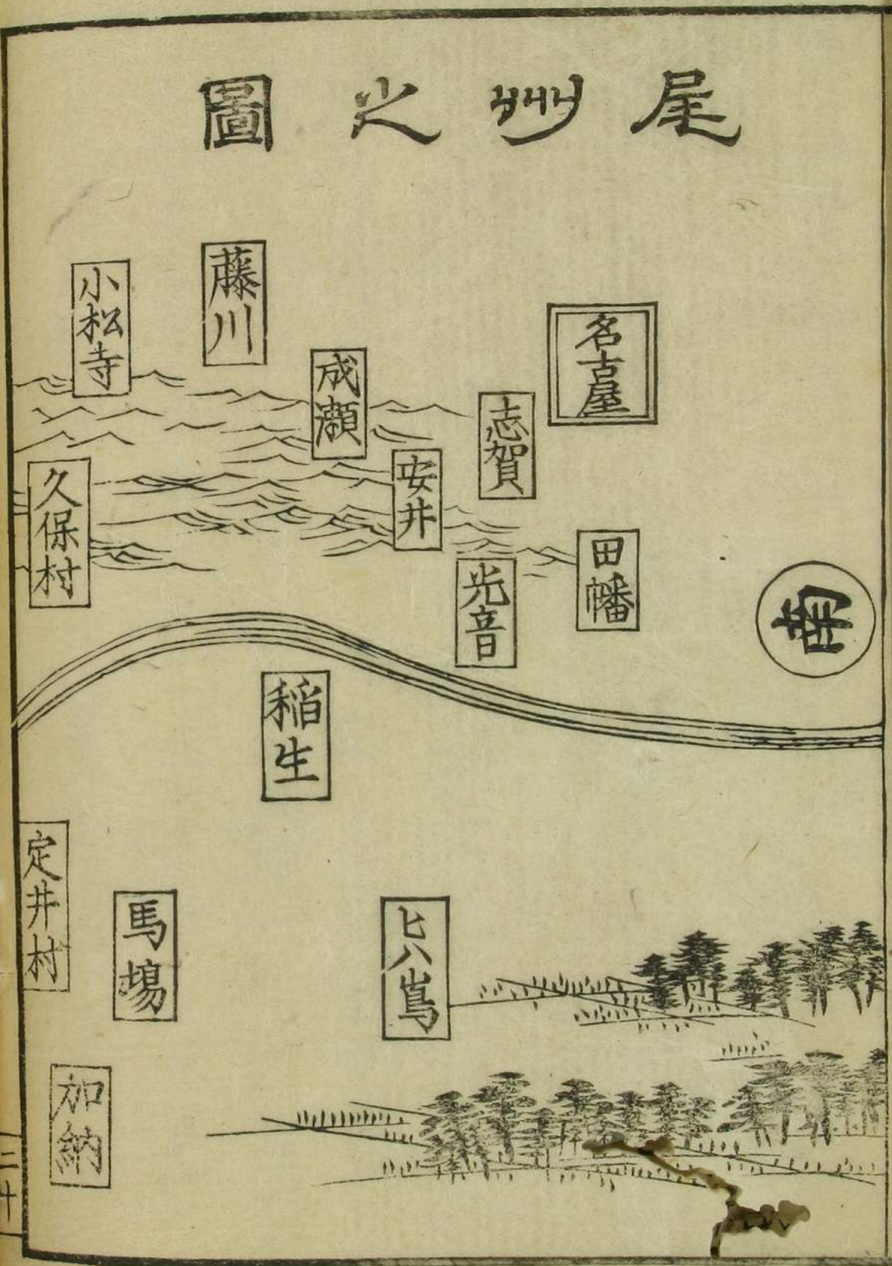
其外箪笥葛籠など種々の雑具の中ふ二三歳の小児を
入るる長持まゝい何まの寺ゑやありけむ什物仏具大太
鼓など浪ゑゆゝまと打上ゝり一の谷の下の方塩屋茶水
の海辺へ遊女躰の者十人計数珠繋ゑゝる死骸打上
ゝり土地の評ゑい淀川をぢ枚方あゝりの遊女なりと
ゝり淡路島へも雑具まゝ遊女と思ゝゝ者あまゝつる
ぎ合ゝる死骸打上ゝるとゝや廿二三日ごろ津の国
神辺の里外国人の営ゝる料理屋を蠻語ゑ「チヤブク」と云
但「コヤブク」ハ凡呂屋の支あり混ぜゝゝぞ右料理屋の亭主の夷人昆崙奴一人と

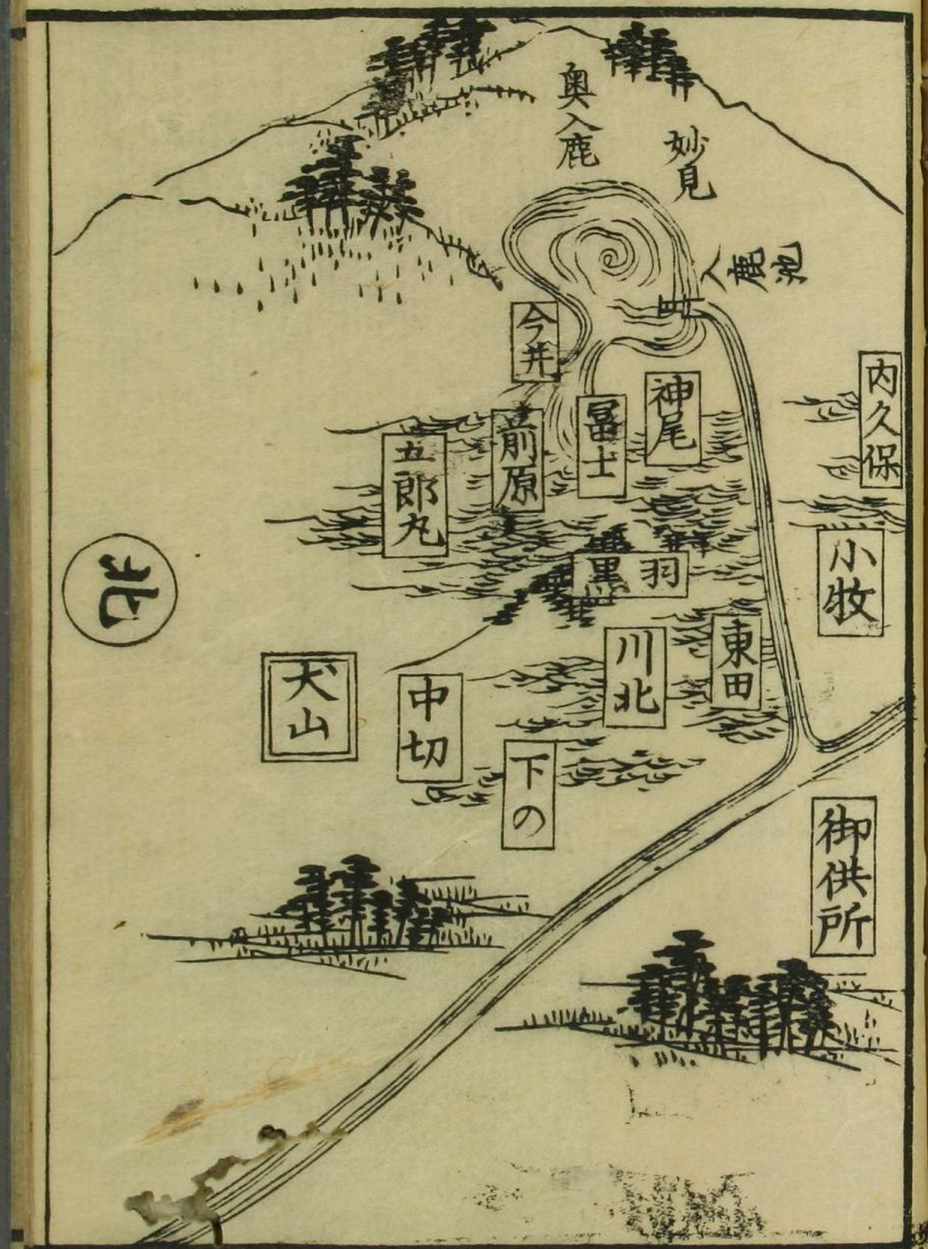
伴ひゝく大坂川口の外国館へ料理代銀の懸取ゑ表ゝる
海上ゑ纏船して死ゝゝ又東横堀瀬戸物屋の者りゑく
外国へ陶器を賣渡せゝゝ代銀の仕切金五百両受取帰り
ゝけゑ是も舩ゝ覆反りて相果ゝるゝ聞へゝゝる
類ひ一ゝ枚挙ぜべ限りもるき支るゝゝ九四日大坂堀江
鐵橋南づめ半丁南の辻東へ入布長ゝ云家より白米二
舛づゝ道頓堀汐見ぢゝ北づめ東へ入布良といふ方より
醤豆三舛宛其近辺へ言ゑをよべぢ諸方へ普く施行有
安立町へい土佐の屋敷ゑゝ最初ゑい飯味噌後ゝゑい米

銭を下さるゝ其外大坂の家くより思ひくゝ施行夥しく
夏し長町と下寺町の間御藏跡の陶器屋より土鍋土器
茶碗皿小鉢などの施行あり誠に廣大の慈善と云べ
又東國の木津川の上伊賀よりつゞきたる山くゝ大きゝ崩
るゝその道をぢ人の往来甚だ難し其後とても牛馬の
通路も決しく成がたく中く二三年の間又い元のごとく修
理も成がたゝとし江州の信樂も大きゝ荒たる風聞あり
特ゝ美濃國い動い水難ある土地あり此度い如何あらん
いまだ詳ならず聞へ出たるくゝ一昨慶應二年丙寅の

八月七日の夜の暴風大雨ゝて大坂も所く洪水ありしが是
いまだ二三日ゝて水落去ゝり此時兵庫西の宮有馬伊
丹など大きゝ破壊し死人四百三十人就中阿波國い殊更
甚だしく五千餘人死亡のよし聞へたり播州の加古川も
堤数ケ所壊て大變なりしが此度い無支ありとやまづ
當年の水厄も京都より凡サ里四方ありんと思ひしが
此頃尾州より来る書翰ゝ曰く上畧此度の大変と
先日よりし雨天ゝる国中何ぞも大洪水十三日ゝ七
より十四日の暁方ゝ東入鹿池西北の方壊破ゝ其近へん

尾州之圖


名古屋
志賀
安井
成瀬
藤川
小松寺
久保村
光音
田幡
稲生
定井村
馬場
七八嶋
加納
西


奥入鹿
妙見
泉
今井
神尾
富士
前原
五郎丸
内久保
小牧
黒羽
東田
川北
中切
下の
犬山
御供所
北

流れ入死数不知先ツ羽黒村あどい村中る千人餘り
死人有之とゆ事こいコギ村あども同断千田屋隠居
とゆ大家流れ老人二人ありいまごふ紀とゆ事その
外村〻も誠に大変にて馬場法光寺〻墓所様まで
水あがりゆい又馬場加納村東〻所〻家三五軒流れ来り
定井村人家牛馬流れ御供所村あども家少〻あがれ死
人有〻い誠に大変前代未聞とゆ事も中〻無き中〻此
度の大変い尾州〻地も弥生に御陰當村近辺も水
い多〻〻人死ものこりゆい此辺も安んてゆい又入鹿池

より東い通行者〻村〻より〻ましい又い見物に来り
き〻〻毒ふ咲〻に〻ゆ天罰もふ恐ふ此上如何
様に恐ふ〻と皆〻大心配に〻ゆい誠に残る物とそハ
一ツもの眼前地獄の有様い如何とゆ事る只此上ハ
神仏をいのるより外の尚委しきい後段とゆ事いと
丸り千石る頃日尾張の人来りて語ると聞に彼人
鹿の池と云い平日十万石御手當の溜水にて此池に小川
通ずる大なる樋あり不虞の変ある時い此樋を上
る時い大水溢れ〻敵を浸す要害ありとゆ然るふ

此樋い破まざれども斯の如き周り三里ばかり一里餘の
大池の西北の方大きゑ壊れゆく近辺十三ケ村悉く流
れ死亡三千人餘にて名古屋の城下の町ばかり迫水来り
程なくして其大変想像べし扨また江列石部辺も南方
北へ流れ川の堤きれ水の変い言もをろかにて流出
る土沙にて家々の軒を埋む程なりとや扨また
長くの雨湿をうけ暑ふる後大暑ふ向へば必らず
病を発せべしとかく家内にて蒼菜又い杜松子或い
薫陸また小豆の屑にて薫てよし服茶あるべし大柴胡湯
弁麻葛根湯不換金等を用ゆべし且ハ大食大酒肉食い
甚だよろしくしるべよりて慎しみ用心せざるべハ大ふ
害をなすなり抑近来諸色高直にて去年以来より米
一弁一貫文余なり所當春より稍く下落し此頃にてハ
一弁四百文までにて あるべし呼ん此度の大変よりつく
まるべく相場俄に引上一弁六百文程に成るべし近村斯
のごとくさゆゑ野菜甚だ拂底にて十八日茄子十ヲ六百文
胡瓜二本百文斗りあり廿日ハ茄子十ヲ三百文大根
七千一弁百八十文乾ざいき百目八百漬鹿角菜一弁四

百文漬すめ一斛六百文其余ハ推てしるべし畑をこゝろん
とゝら青物一切るゝ當夏ハ野菜尽て雑穀あるべし
何ゆへふゝのゝ天変地妖屢ゝるや然まども天
と恨らゝ世をうゝべきを支ゝあゝぞむゝ尭の世
も洪水あり湯の代も三年旱あり畢竟ハ天地乃
病気ゝゝやまゝ天ゝ心あゝゝ災を下しのゝゝも
せゝ書の大甲ゝゝゝ天の作る孽ハ避べし自ゝ
作る孽ハ遁るべゝゝぞとゝや因て無益の雑説流言等
とゝさゝゝ鬼角とのゝ其身をてゝしゝて奢侈を省

き正直を第一とゝ慈悲善根を専ゝとゝさば災も
却て福と成べく頓て豊なる世ともあゝべし
扨又七月十五日十六日十七日左のゝ大雨ゝてもかゝ
ゝ已前のゝゝ大水ゝ成て大和川瓜野堤大半普請
出来ゝる処ハ勿論其上手大ゝ崩ゝ其水元の破損所へ
落来り安立町かどハ已前よりも甚しく真ゝ目ゝ
當らゝゝ次第ゝ。池田道場川原かどゝ殊の外洪
水の由実ゝ天変といふべし

洪水圖説終